
種売り

菜雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
種売り

【Nコード】
N6912S

【作者名】
菜雲

【あらすじ】
世にも不思議な植物の種を売り歩く謎多き青年「種売り」。時に密やかに、時に幻想的に、そして時には残酷に種は芽吹く。種売りが売る不思議な種と、種に出会った人々の物語。

序章

興奮気味の葉汰よしたが梓あずさを引っ張って来たのは、彼女のよく知る裏山だった。

村の奥に位置するそこは様々な種類の木や草、蔓などがうっそうと茂る暗い山だが、

山のとっぺんより少し下、村とは反対側の夕日がよく見えるあたりに一カ所だけ少し開けた場所がある。

まばらな樹々の間から日光が差し込んで色とりどりの花が咲き乱れており、彼女のお気に入り場所の一つであった。

葉汰が梓を連れて来たのはその花畑、正確には茂みに身を隠しながら花畑を覗けるところである。

花畑が近づくにつれて枯れ葉や小枝を踏まないよう慎重に歩く彼の姿に、後を追う梓も自然と息をひそめる。

一際美しい百合が咲いている横の茂みに葉汰に続いて猫のようにするりと潜り込むと、振り返ってしゅと唇に指を当てる彼に無言で頷いた。

「ほら見ろよアズ、あそこだ」

最低限の息だけでそう呟くと、葉汰は花畑の中央あたりを指差した。

梓は茂みを揺らさないようにそっと外が見える位置まで顔をずらすと、興奮でキラキラ輝く葉汰の瞳を一瞬見やり、その真っ直ぐ伸ばされた人差し指を辿って外へ視線を向けた。

「あれは……」

そこに見えたものの意外さに思わず呟いて眉をひそめる梓に、葉汰は輝く瞳を真剣な色に染めて囁いた。

「雪女って本当にいたんだな」

すらりとしてたおやかな立ち姿、白く輝く長い髪、日の光を避けるように差した傘の下で小さな花に伸ばした指は、透けるように白い。少し上背がありすぎる気もするが、その姿は確かに雪女に見えないこともない。

「……でも、こんな春の日差しの中で雪女が生きていられるとは思えないわ。

雪女以外にも妖はたくさんいる。あやかしもしかすると鬼かもしれないわよ」彼女の言葉に葉汰は眉を上げる。

「鬼だって？ あんな少し突けば倒れてしまいそうなの？」

「鬼の姫なのよ、きつと」

重々しく言った梓に、葉汰は納得の色を見せた。

そうか、姫なら……と呟きながらも一度白い女を見ようとそっと体の向きを変える葉汰につられて梓が茂みの外に目を向けた途端、

すぐ側でこちらを覗き込む薄紅色の瞳と目が合った。

「きゃっ！」

驚いて尻餅をついた梓に続いて葉汰も悲鳴を上げた。

鬼姫はそんな二人の様子に何をするでもなくじっと目を注いでいたが、二人が互いを守るように体勢を立て直したところでそっと口を開いた。

「残念ながら私は妖ではないし鬼でもない」
その瞳は笑んではいなかったが、纏まとう空気まの穏やかさに二人は僅かに緊張を解く。

「なにも人の髪の色は、射干玉ぬばたまや濡れ鳥ぬれがらすに限ったものではないのだ

よ」

鬼姫ではないらしい白い人は自分が妖に間違われた理由を分かっている風だったが、髪の色が……なんだと言った？

梓は首をひねる。

「ぬばたまって？」

「檜扇ひおうぎという、とてもとても美しい黒い種を作る植物がある。その種の通称を射干玉というんだ」

葉汰がまだ少し怯えたように問いかける。

「そ、そのなんとかって木の実とあんたの髪の色と何の関係があるんだよ」

白い人は少し首を傾げて懷に手を入れた。

「……射干玉は木の実ではなく、草の種だ。ほら、ご覧」
そういつて懷から手を抜きだすとそとと広げた。

透き通るように白い手のひらの上に、夜空よりもずっとずっと黒い小さな粒が三つ。

「ひとつずつ、差し上げよう」

「いらねえよ、そんなもん……」

葉汰がじれったそうに眉間にしわを寄せる。

「あのさ、あんた話が反れてるの気付いてる？」

白い人の静かな声と優しい口調に段々と遠慮がなくなって来ている。それに……鬼姫でも雪女でも妖の娘でもないと判ってしまったのも、彼のぶっきらぼうな態度の原因の一つかもしれない。

「ああ失礼。だが、美しいだろう？ 黒く艶やかな美しい髪の色は、よくこの射干玉に例えられる。濡れ烏も同様だ。濡れて黒さを増し青みがかって見えるカラスの羽のように美しい黒髪、という訳だ」
そういつて白い人は自らの白い髪を一房手に取った。

「だが、この国を一步出れば髪の色は黒ばかりとは限らない。赤、

茶色、金色、色素の量によって様々な色がある。瞳の色もそうだ。君たちは青い瞳は見たことないだろうね」

「じゃあ、あんたも異国の人だっていうのか」

白い人は葉汰の問いに小さく肩をすくめた。

「いや、私は生まれつき色素を持たないってだけだ、私の母も父も黒い髪に黒い目……のはずだ」

「じゃあ、あなたはこんなところに何をしに来たの？」

「良い質問だ」

白い人は梓の問いに僅かに口角を上げた。

「私は種売り。植物の種を販^{ひき}ぐ者。美しい山に美しい種を探しに来たのさ」

そう言って目を細めた様子は妖しくも見える美しさがあったが、葉汰は氣に入らなかったようだ。

「ふん、あんたが鬼でも妖でもないなら興味ないね。行こうぜアズ」

「あつ、待ってよ葉汰」

くるりと振り返って駆け出した葉汰を追おうとしながらも後ろが気になって走り出せないでいる梓に、白い人は射干玉をのせた手を差し出した。

「ほら、記念に持ってお行き」

そういって一瞬悪戯っぽく瞳を煌めかせると、白い人は顔をあげて走る葉汰の背によく通る声で呼びかけた。

「葉汰くん、私が姫じゃなくて悪かったね」

「くそっ……シキソってなんだよ！」

振り返ること無く叫びながら遠ざかっていく葉汰に、紅い瞳に白髪の青年は小さく吹き出した。

彼は射干玉を握りしめた私に（結局三つともくれた）麓まで送っていかうかと申し出てくれたが、梓は慣れた場所だからと断って葉汰の後を追った。村まであと少しというところでやっと追いついた葉汰は随分ふてくされていたが、梓が射干玉を一つわけてやるとまんざらでもなさそうな顔をしていた。

第一話 髪を飾る花

??へえ、種ねえ。そりゃまた……悪いけどうちは野菜の種なら間に合ってるよ

??いえ、農業用の種ではないのです。木の種、草の種、花の種、それも世にも珍しいものを……

??ふうん。だがあたしにやそんな珍しいものを集める趣味はないからねえ

??左様ですか。ですがこちらなど如何でしょう……

「あ、白い種屋さん！」

八百屋のおばさんと話し込んでいる種売りを見つけて、梓は声を上げた。

彼女の声に白い彼とおばさんが振り返る。

おばさんはおや?という顔で、種売りは無表情に。

裏山の花畑であった時もそうだったが、相変わらず何を考えているのか分らない。

「やあ、アズちゃん……だったかな」

葉汰が呼んでいた名を覚えていたのだろうか、種売りはふたつばかり瞬きをすると梓に声をかけた。

彼に覚えられていたことに少し嬉しくなって、梓は顎を上げてにと笑った。

「あたしは梓だよ!ねえ、村に下りて来たんだね」

「ああ、ちよつと商売にね」

「なんだいアズ、知り合いかい？」

親しげに種売りに話しかける梓に八百屋のおばさんが不思議そうな顔をする。

そりゃ、こんな見るからによそから来た青年と梓が顔見知りだったら不思議だろう。

私がこの村じゃ一番最初に知り合ったんだ、と梓はちよつぱり優越感に浸った。

まあ、あの時は葉汰もいたけれど、あいつは怯えてばっかだったからあたしのが先よ。

「うん！こないだね、葉汰が種屋さんを雪女と間違って追いかけて回してて。雪女見つけたから一緒に来てくれーって言うもんだからついてったら、人間のお兄さんじゃないのさ。そいでちよつとお話したの。綺麗な種もくれたんだ！」

妖だ鬼だと騒いだ自分のことは完全に棚に上げた梓の台詞に、おばさんは吹き出した。

「まあまあ葉坊ったら！雪女だって？おっかしい！……まあ、確かに見えないこともないかもしれないがねえ」

あんた女みたいだし、とじろじろと眺め回されて種売りは居心地悪そうに身じろぎした。

梓が「種屋さん恥ずかしがってる！」と指差して笑うと、彼は顔を赤らめて薄紅色の目をそらした。

なんだ、ちよつとは人間らしい顔もするんじゃないの。

その様子を笑いながらも注意深く観察していたおばさんは一つ頷いた。

「ま、いいだろう。アズの知り合いだってんならちよつとだけ見てやろう。お兄ちゃん、さっき言ってた珍しい種とかいうの出してご覧。良いもんなら、一個くらい買ってやってもいいよ」

種売りは、脇に置いていた木の箱から手のひらに乗るくらいの小さな紙の箱を出した。

梓にも見えるよう少しかがんで藍色の蓋を外すと、中には小さな乳白色半透明の丸い種が五つ。

「それ、知ってるよ！竜のひげの種だ！」

梓が自慢げに声を上げるとおばさんが感心したように目を見開いた。

「へえ、これを知ってるのかいアズ。あたしゃこんなもの見たことないよ」

「へへ、竜のひげはキレーな青い実でね、中にこんな透明の種が入ってたよ」

種売りは自慢げな梓の様子を静かに見つめていたが、頃合いを見て少し首を傾げると口を開いた。

「正確に言うと、リュウノヒゲのあの青いのは実ではなくて種子ですね。半透明の部分は種の中身ってことになります。……ああ、ちなみにその半透明のもの、投げてみたことありますか？」

「投げる？ううん、ないけど」梓は不思議そうな顔で聞き返す。

「今度見つけたら、青い皮を剥いて硬い石の上かどこかに落としてみてご覧なさい。鞠のように跳ねますよ」

「へーっ！おもしろそう。種屋さん、それ貸してよ！」

そう言って箱の中身に手を伸ばそうとする梓から、種売りはひよいと箱を遠ざけた。

「何よ、ちよっとくらい良いじゃない。ケチ！」

不満そうな梓に種売りは少し困ったような笑顔を見せる。

「これはリュウノヒゲの種じゃないんです。しかも、迂闊に触ってはいけない類のものだ。申し訳ない」

「え……」

なら何で最初からそう言ってくれなかったのさ。自信満々だった自分の態度が恥ずかしくなって梓は赤くなって俯いた。そんな梓の様子も種売りは全く気にしていないようだ。そういえば葉汰に睨みながら問いつめられてる時も、この人は暢気に「木の実ではなく草の実だ」なんて言ってたっけ。

「触っちゃいけないって、そんな危ないものならいらないよ」

眉をひそめるおばさんに種売りは不思議そうな顔でぱちぱちと瞬きした。

「危ない……？ ああ、人体に害があるわけではありませんよ。いいですか、これをこう……」

そう言いながら種売りはいつの間にか手にしていた竹の箸で種を一つ器用につまむと、片膝をついて右腕を頭の後ろに回し、首の左側にかかる白い髪をかきあげた。

ほっそりしたうなじにおばさんがうっすら頬を赤らめたが、やはり種売りは気にしない。

彼は髪を上げたまま、左耳の後ろにそっとつまんだ種をのせる。何をしているんだという表情の梓たちに種売りは「ほら、よく見」と声をかけた。

その言葉に、梓がおそるおそる種売りの耳の後ろを覗き込む。

「あっ！ 芽が出てる」

「なんだって？」

梓の声に躊躇していたおばさんも顔を近づけ「まあ、ほんとだ」と驚きの声を上げた。

半透明の種は種売りの耳の後ろの肌に細い根を伸ばし、そして小さな小さな緑色の芽を出していた。

「でも、どうしてこんなすぐに？」

「さっき触ってはいけないと言ったでしょう。この種は人間の皮膚

に触れると一瞬で根を伸ばして自分を支え、そこで芽を出すのです」
種売りの言葉におばさんがほんの少し青ざめる。

「それって、人間に寄生するってことかい？体に根を張って養分を吸い取るの？あんたそんなのくつつけて平気かい？」

それは梓も気になっていたことだ。そんなものに植えて種売りは大丈夫なんだろうか。

種売りは僅かに笑みを浮かべた。

「大丈夫です。この根に皮膚を突き破るだけの力はありません。汗や皮脂を吸って生きるのです。こうして頭に植えれば頭皮が健康になって髪も綺麗になりますよ」

「おやまあ」

綺麗になる、の言葉におばさんの目の色が変わる。

いつも豪快なおばさんだがやはり女性、そういうことには敏感なようだ。

梓も、危なくなくて髪が綺麗になるならちょっといいかも、と思ってしまった。

「まあでも、やはり汗よりは血液なんかの方が栄養は豊富です。これを普通に育てれば花が咲くまでに十日はかかりますが……」

そう言って種売りは左手の人差し指を道具箱から取り出した細い針でひと突きし、浮き出た赤い滴をそっと種から伸びる根の上に置いた。

細い根がすっと滴を吸い込んで薄紅色に染まった。

その直後、小指の爪よりずっと小さかった双葉からすっと葉が伸びる。

見る見るうちにその植物は種の殻を脱ぎ捨て、本葉を増やし、茎を伸ばして種売りの白い外耳に華奢な巻きひげを絡めた。

まるでそこだけ時が経つのが早いような、現実離れた光景に梓は息をのむ。

植物は彼のこめかみのあたりまで伸びると成長を止め、小さな桃色の蕾をつけたかと思うと、少し渦を巻いた花卉を解くようにあっというまに開花した。

鉄線に似た一寸ほどの濃い桃色の花は、風に揺れて種売りの白い髪を華やかに彩っている。

「血液を与えなければ白い花が咲きますよ。三週間もするとしばらくで種を作ります。これを触れないように収穫するのに少し注意が必要ですが……如何なさいました？」

種売りは目だけを左上に向けて花が生長するのを見ながら淡々と説明していたが、

そこでふっと視線を梓たち二人に戻し、なんともいえない表情をしている二人の顔を首を傾げて眺めた。

「種屋さん……悪いんだけど、やっぱりいらないかも」

「私も遠慮しとくよ」

花が急速に育つ様子は非常に幻想的であつたし、種売りの血を吸って赤く染まった花は非常に可憐で彼によく似合ってもいたが、その可憐な姿がどうにも不気味さを増しているように思えてならない。いくら安全だと言われても、血を吸って育つ植物を自分の頭に植えるなんてごめんだ。

「おや、そうですか。髪飾りに良いと思ったのですが」

「その花の名前、なんていうの？」

予想外にあっさり引き下がり商売道具を片付け始めた種売りに、梓はそっと声をかけた。

振り返った種売りは少し考え込むような表情になったが、顔を上げると真っ直ぐに梓の目を見つめて答えた。

「私は、この不思議な植物たちに名前は付けないことにしてるんです。なんとなく、私が名付けて良いものではないような気がするんですよ」

そういつて彼は今までで一番優しい顔をして笑うと、耳の上の花を愛でるようにちよいちよいとつついた。

第一話 髪を飾る花（後書き）

鉄線というのは、クレマチスのことです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6912s/>

種売り

2011年10月8日11時02分発行